

# 北部地域 療育センターだより

第17号

## センターだより第17号発行にあたって

北部地域療育センター所長 今枝 正行

北部地域療育センターは、令和5年度からの「社会福祉法人 よつ葉の会」への民間移管に向け、療育の引き継ぎを行っているところです。今回の療育講演会は、通園・グループ療育を中心としました。センター開設20年間の総まとめとして、一人ひとりに合わせた療育と、生き生きとチャレンジする誇らしい子どもたちの姿をお伝えしたい職員一同の思いを込めました。

療育センターは、個性・多様性を大切に、子どもたち一人ひとり全員が主役となる療育を実践しています。「何を見て、聴いて、感じているか、訴えているか」一人ひとりの気持ちに寄り添い、子どもたちが安心して伸び伸びと生活できる環境をつくります。医療的ケアなどのサポートを必要とする子どもたちも、日々の活

動に楽しく参加しています。そして保護者のみなさんも、お子さんと、仲間たちと見事なチャレンジをされています。

振り返りますと、急増する発達障害関連の相談を背景に、保育所、幼稚園、学校など地域諸機関と発達支援を通して、フェイス トゥ フェイスの連携を深めてきた20年でもありました。「北部地域療育センターよつば」は、これまでに構築してきたサポートのネットワークを土台に、子どもたちが「共に育つ」インクルーシブな風土づくりを目指して療育を展開して行く所存でございます。みなさま今後とも、よろしくお願い申し上げます。

## 第19回 北部地域療育センター療育講演会

「これまで、いま、これから」～療育のおもいをつなぐ～

日時：令和4年11月30日(水) 会場：西文化小劇場

### 療育センターの概要

療育センターは、住んでいる地域で、Dr.を始めとしたさまざまなスタッフが連携して、お子さんの医療面や発達面などを総合的に評価し支援しています。保護者の方から初診の予約を取っていただき、診察や発達検査を受けていただく中で、関わり方や環境の整え方などのアドバイスを行い、必要があればハビリテーションを行っています。また、継続してフォロー

が必要な場合には、グループ療育に参加していただき相談に応じていきます。さらに、通園施設があり、親子通園と単独通園を併用しながら、お子さんの成長を傍で見ていただくことができます。その他、園への巡回療育やご家庭への訪問療育も行っています。児童発達支援事業所（デイサービス）については、相談支援専門員が相談に応じています。

初診の発達相談では、ケースワーカーが受理面接(インテーク)を担当します。インテークでは、保護者の主訴を確認し、情報収集します。次に、心理士が発達検査を実施し、発達評価を行います。検査は、お子さんにどんな特徴があるのかを掴むために行います。最後に、Dr.が診察でお子さんの行動観察をし、診断やアドバイスをこなっています。

## ケースワーカーが大切にしていること

ケースワーカーは、療育センターの窓口であり、療育センター全体に関わる仕事をしています。分からないことがあれば、まずはケースワーカーにご相談ください。

インテークでは、アイスブレイク(緊張を解きほぐすこと)、アセスメント(幅広く情報収集すること)、保護者の気持ちを受け止め尊重し、傾聴することを大切にしています。相談意欲のある方ばかりが来られるわけではないので、どんな方でも“また相談したい”と思えるように心掛けています。

育児に不安を抱えている保護者はとても多く、発達に心配があればなおさらです。もしも障害があったら…と不安な中、勇気を出して電話をしてくださり、話しながら涙される方もいます。一方、心配していないが、周りから受診を勧められ、気が乗らないまま予約される方もいます。保護者の方が主体的に相談に来ない場合、こちらからの助言が上手く伝わらないことがあります。どんな方にも主体的に継続して相談に来ていただけるように、時間をかけて信頼関係を築いていくことを心掛けています。また、初診では受診までに2~3ヶ月お待たせしているのが現状です。不安な気持ちの中お待たせしてしまったことをお詫びし、来ていただいたことを労っています。

相談に来ていただくと、お子さんのできない面ばかりに注目している方が多いです。そして、その悪循環から抜け出せず苦しくなっている場合が多いと思います。まずは、お子さんのいい所を見つけ、共有し、保護者の方が子育てに自信を持っていただくことを大切にしています。保護者の方が育児に前向きに、お子さんにポジティブに関わって行けるように支援しています。

育児は、余裕がないとイライラしうまくいけません。療育にも気持ちの余裕が必要です。お子さんと笑顔で接することができるよう、サービスを案内し、一人で頑張りすぎないようにお話しさせていただいています。保護者の方の笑顔が、お子さんにとっての一番の発達の源、療育になると思っています。

## 外来診療で大切にしていること

表①に「保護者、子どもと向かい合う心構えと姿勢」、表②に「療育全般で大切にしていること」を示しました。

### 外来診療で大切にしていること①

- 「出会い」子どものありのままを認める(受容と共感)
  - ▶子どもらしさを支える大人でありたい「一緒に遊ぶ」
  - ▶親子がありのままでありたい安心の場に
- 「診断」本人と家族のもの
  - ▶障害受容のプロセスを共に歩む
  - ▶障害受容はきわめて個性が高い
- 「はぐくむ」
  - ▶発達保障の基本的要素「信頼、安心・安全、自発性」
  - ▶子どもの自尊心・親の養育レジリエンスを育む
  - ▶自己肯定感は社会の肯定的まなざしで育まれる



障害受容の螺旋形モデル  
中田洋二郎  
(1995)

### 外来診療で大切にしていること②

- 「障害は、状況や環境によって変わる」
  - ▶必要なサポートの質、量に応じた合理的配慮
  - ▶参加障害にしない
- 「つなぐ」地域の機関との顔の見える連携
  - ▶横の連携と縦の連携 多くの機関との連携「みんなで支え合う」
  - ▶学齢期へつなぐ 精神科への移行支援など
- 「療育センターの強み」
  - ▶ベースに保育(通園・療育グループ)がある中での診療
  - ▶多職種協同 保育・相談・診療・個別療法—それぞれの専門性
  - ▶仲間づくりの場

大切にしているのは、親子にとっての安心の居場所となっていただくことです。遊びは、子どもの言語、大人と子どもの気持ちの交流のチャンネルです。遊びを通して親子ともにリラックスし、困り感や気づきを話していただきたいです。また、子どもらしさ、子どもとして抱く思いや姿を支える大人であり続けたいです。

保護者の障害の認識と受容の様相は様々ですが、発達障害においては「障害受容の螺旋形モデル(中田洋二郎1995)」が保護者支援に有用です。中田は、両面の色が違うリボンの表(白)を障害を認める気持ち、裏(黒)を障害を否定する気持ちに例えました。保護者の内面には、障害の肯定と否定、両方の気持ち共存しており、否定と肯定を繰り返して経験しながら、障害を受け入れていく紆余曲折の過程を辿っていきます。支援者は、表の姿だけでなく、保護者の内面へ想像力を働かせる必要があります。螺旋モデルは学齢期以降も続くものであり、フォローの中で障害受容のプロセスを共に歩む意識を持って診療にあたっています。

障害のある子どもの保護者は、葛藤から精神健康度が低下するリスクがあります。回復力やしなやかさを意味する「レジリエンス」という言葉があり、養育困難であっても良好に適応する過程「養育レジリエンス」の臨床研究があります。研究では「子どもに関する知識を豊富に持っていること」「社会的に十分な支援を

受けていること」「育児を肯定的にとらえていること」の三点が重要とされています。幼児期の支援者は、我が子の一番の理解者である自信を親御さんにもっていただけるように支え、学齢期につないでいく姿勢を持ちたいです。発達外来では、幼児期から親子で頑張ってきた経過、歴史を知っている立場を活かし、「養育レジリエンス」の向上を意識して、診療しています。

子どもは、大人の肯定的まなざしのもとで「信頼、安心・安全、自発性」を育み、発達していきます。これらを土台として、保育・療育・教育の現場で、自己効力感や自己肯定感、そしてレジリエンスなどを育んでいく意識が必要です。親子一緒に診察で、親の相談する姿を見ていた子どもが成長し、子ども自身が相談者として訪れてくれるという経験もしています。

発達特性の多くは就学前後までに顕在化しますが、サポートニーズはライフステージを通して持続するため、支援を引き継いでいくことが重要です。子どもと家族を中心に多領域、多職種が、地域で切れ目なく連携していく体制づくりが各地域で進められているところです。発達外来はライフステージを通して関与できる立場であり、二次障害の予防や早期対応あるいはライフステージ移行期の進路選択の場面などで力を発揮することができます。

### 個々の子ども・家庭への ライフステージにそった支援

乳幼児期	児童期	思春期	青年期	成人期
保育所・こども園 幼稚園・通園	小学校	中学校	高校	大学 就労
健診・早期療育	特別支援教育 (特別支援学級・特別支援学校)			就労支援 生活支援
	移行支援			移行支援
親の気づき 子育て支援 親同士のつながり	9～10歳の節 本人の気づき ポジティブな自己像形成への支援 二次的障害の防止			自分らしさ 自分を知る 自己実現へ

療育センターの発達外来は、個別療育、グループ療育、通園療育をバックに、保育、心理、福祉、医療、といった多職種で協働した支援を行うことができます。外来診療を窓口として、地域の諸機関との連携をより深めていきたいと思っています。

## 療育グループ

療育グループは親子で通う小集団の教室で、年齢と発達状況に応じたグループがあります。午前中は、就園前の子どものグループ、午後は、就園している子どもを対象とした並行グループを行っています。頻度は、週に1回もしくは2週間に1回程度で、費用は無料です。スタッフは保育士、心理士、療法士、保健師などです。専門性を生かしたアドバイスをしたり、個別療法につながることもあります。グループに通う意味は年齢や発達段階によって違いますが、今回は発達障害を中心にお話しします。

就園前グループでは、制作や感覚遊び、園庭遊びなど色々な遊びを経験したり、自由遊びや朝の会などで集団行動の練習をしています。親子の関わり方や、周りの友だちやスタッフへの興味や関わり方、活動内容への取り組み姿勢などを通じて、日々の子育てや進路の援助につなげています。

就園前グループではどんなことするの？ <プログラムの例>	
9:30	自由あそび
10:00	開始・行進 体操 親子あそび 朝の会 手遊びうた、呼名 (ペープサート選択) カード合わせ
10:30	課題活動 (制作 運動遊び 楽器あそび プールなど)
11:00	トイレトレーニング ・おやつ 又は 給食 ・絵本読み聞かせ
11:30	さようなら

プログラムの内容には、一つ一つ意味があります。オモチャを共有する自由遊びでは、お友だちの遊び方を見たり、オモチャの取り合いでお友だちを意識する練習ができます。体操や手遊びは模倣の力を育てます。模倣が出来ることは言葉の発達にも重要です。親子遊びでは楽しい気持ちや時間を共有することで共感の気持ちが育ちます。朝の会では園生活に向け、着席・進行する職員への注目・自分の名前の意識・集団の一員であることの認識など、様々な練習ができます。課題活動では、順番待ちなど集団のルールを経験し、運動や制作遊びでは身体や手指の使い方も見えています。給食を年間5回程度提供しています。発達障害があると偏食であることも多いので、おやつや給食で様子を見ながら、アドバイスをしています。

並行グループは、ASD (自閉症スペクトラム障がい) やADHDを中心に、園生活に困り感を抱えていたり、支援を必要とする子どもが通っています。園では、できないことや注意を受けることが多く、自信を持ってなくなっていることもあり、グループでは、あ

えて簡単な課題を設定し、自信をつけ、いきいきと生活できる意欲につながっています。そうすることで、園でも過ごしやすくなるがあると思います。

プログラムの流れです。始まりの会での課題や、

活動内容は通っている子どもの得意・不得意に合わせて変えています。年長児のグループ

並行グループではどんなことするの？

<プログラムの例>	14:00	自由遊び
	14:30	開始
		親子あそび 始まりの会 手遊び カード合わせ
	14:50	課題活動 机上課題、運動あそび 集団遊び、プールなど
	15:30	おやつ
	16:00	絵本読み聞かせ さようなら

では、就学を意識して数や平仮名のプリント等を用意しています。姿勢がすぐ崩れて集中が続かない、筆圧が弱くうまく鉛筆を扱えないなど気になる場合、療法士に見てもらうこともあります。

保護者支援では、毎回連絡帳を使用し、保護者に家での様子や成長の気づき、悩みなど書いてもらい、コメントを記入するか直接お話しします。保護者の困り感や子育て感を連絡帳で知ること、援助しやすくなります。個人懇談を年間2~3回行い、進路や生活の支援に役立てています。専門職による保護者向けの学習会も設定しています。また、雑談も重視しています。グループを終了した後も、翌年は保護者の方に月1回アフターケアグループに来ていただいて園や家庭の様子を聞き、必要があれば巡回療育や小児科診察につなげます。

グループには、年間100組近くの親子が参加します。短時間の関わりで子どもの発達を促すために保育士に何ができるか。私はいつも、保護者を笑顔にするためのアプローチを



考えています。発達がゆっくりだったり、困った行動ばかりが目立つ子どもには子育てに喜びを感じられないことも多く、不安も大きくて初めは表情の硬いお母さんも多いです。子どもは必ず成長しますが、ポイントを押さえていないと見逃してしまう小さな成長であることも多いので、そのポイントを教えてあげて、一緒に喜び合うようにしています。まだ発語がなくても、表情が乏しくても、子どもは気持ちを、視線の動きや身体の動き、自分のできる形で発信しています。それは、大事な言葉です。発信の弱い場合は、親子遊びなどを通して笑顔を引き出したり、苦手な活動で嫌な気持ちを表現する練習をします。子どもの笑顔や色々な姿をみることで、お母さんは子どもの新たな面に気づ

き、もっとたくさんの笑顔がみたい、成長が見たい、と積極的に考えられるようになります。スタッフへの信頼が生まれると、発達段階など深い話をしやすくなります。悩んだ時に頼れる場所があることは心のゆとりにつながります。グループが終わる頃には、お母さんの表情は通い始めた頃よりうんと柔らかくなっています。

保育園、幼稚園への巡回療育では、発達障害がある子への適切な関わり方が知りたい、とよく言われますが、笑顔で園生活を楽しめているかを見ていただきたいです。笑顔がもともと少ないなら、安心して過ごせているかを表情から読み取ってください。発達障害がある子にとって、大きい集団の中で笑顔となれる場所を用意することは意外と難しいです。だから、園が安心して過ごせる居場所となっていれば、それで十分だと思います。保育士は子どもの育ちの一部分しかお手伝いできません。一生育てていくのは保護者です。成長の過程で困ることが出てきたとき、適切な場所に相談できるような心持ちを保護者に作ってあげることが私たちの役割と思っています。

通園

通園では全体で大きく4つの目標を掲げています。

- ①丈夫な身体作り→毎日の生活リズムを整え、いろいろな遊びや運動を通して丈夫な身体作りを目指します。
- ②基本的な生活習慣作り→毎日の規則正しい生活の中から食事・排泄・着脱衣などの基本的な身の回りのことを自分でできるようにします。
- ③集団生活への参加→遊びや課題を通して友達や職員を意識し豊かな心を養います。
- ④親子関係作り→親子登園や行事などいろいろな経験を通してしっかりとした親子関係を作ります。

たんぽぽ組・ちゅうりっぷ組・さくら組について

たんぽぽ組・ちゅうりっぷ組・さくら組には、自閉症スペクトラムと診断された子どもを中心に、発達がゆっくりな子どもたちが通っています。家庭環境や性格は様々であり、一人一人発達段階や必要な支援も違います。私たちはまず「その子がどんな子なのか」「家庭環境は?」「何ができてどんな事が苦手なのか」を探り、一人一人に合った支援を大切にしています。毎日同じことを繰り返すことで、できる事を増やして成長に繋げるよう日々療育をしています。

日課は、どのクラスも同じ流れです。朝の会の内

容は各クラスそれぞれ違います。

朝の準備です。写真のように絵カードを見てそれ



朝の準備の様子

ぞれ指定の位置に置いていきます。初めは職員と一緒にいきますが、日々の繰り返しの中で一人で出来るようになっていきます。

次は朝の会です。これは今月の絵本を見ている写真です。絵本は各クラスの月の当番が選び、1ヶ月同じ絵本を読み続けます。子どもの反応によっては途中で変更することもあります。



絵本を見ている様子



ぺったんの様子

「ぺったん」は、注目の力・認識する力・手先を使うことを目的として取り入れています。ホワイトボードにマグネットの付いた絵カードなどを貼っていきます。写真は

上下に分割した動物の絵カードを合わせるものです。他には、大小など2つのグループに分けるものや、形合わせ、色合わせなど職員が子どもたちにあつたものを考えています。

続いて活動の内容です。

新福寺公園に散歩に行った時の写真です。他にも八幡神社・白山神社に行ったり、近所をぐるりと散策するときもあります。散歩に行くことで職員と手をつないで歩くことに慣れる、交通ルールを知り守ること、遊具の遊び方を知るなどの目的をもって取り組んでいます。



散歩に行った時の様子

1~2か月に1回、外部から音楽療法士を招いて



音楽療法の様子

取り組んでいる音楽療法は、子どもたちの大好きな活動の一つです。色々な楽器に触れることで音色や感覚を経験できます。順番を待つことや

お友だちがやっているのを見ること、みんなの前に出て療法士とセッションを行うことなど様々なことが経験できます。子どもによっては苦手な音があることもあり、その点は配慮が必要なこともあります。

感覚統合遊具の1つであるラダーウォールで遊んでいます。感覚統合遊具にはこの他にも様々な種類があります。ラダーウォールでは自分の身体を自分で支



ラダーウォールで遊ぶ様子

える腕や足の力、バランスを取る為の体幹も必要になります。それらを遊びの中で身につけることができ、かつ子どもたちが楽しんで取り組むことができる活動の1つです。

## ひまわり組について

ひまわり組は、肢体不自由や歩行がゆっくりな子どものクラスです。脳性麻痺や筋ジストロフィー等の疾患で自立歩行が難しかったり、ダウン症や超低出生体



PT(理学療法)の様子

重児で生まれ、発達がゆっくりで歩行が不安定な子がいます。それぞれの運動発達に合わせて個別療法を受けています。

PT(理学療法)の様子です。脳性麻痺でまだ自分で立つ事は難しいのですが、補装靴を履いて療法士がついて立つ練習をしています。



OT(作業療法)の様子

OT(作業療法)の様子です。普段はうつ伏せで過ごしていますが専用の椅子に座る事で姿勢がとれ、療法士とスプーンですくう練習をしています。

ひまわり組の療育は、療法士との連携を大切にしています。個別療法を見学したり、療法士にひまわり組に来てもらったりしながら、その子に合った椅子の調節や、介助の仕方、姿勢の取り方などの助言をもらっています。また保護者向けに療法士による学習会を行ったり、保護者とも連携し、情報を共有するようにしています。

みんなが大好きなホールへ移動する様子です。手すりを使っていく子やずり這い・四つ這いでいく子がいます。



ホールへ移動の様子

毎朝のトンネルくぐりの様子です。療法士のアドバイスを元に始めました。歩けるようになってからも四つ這いをすると体幹を鍛え、しっかりした歩行に繋がっていきます。自分で座ったり、歩いたり難しく身体を積極的に動かす経験が不足している子どもも多く、自主的に身体をしっかり動かせる事はないかと考え、毎日行っています。個別療法でやっている動きを日々の保育の中で繰り返す事で、「自分の身体を学習するような感覚」が持てればと思っています。雨の日で散歩に行けなくても、できるだけ身体を動かせるようにセンター内を周りたりしています。



トンネルくぐりの様子



朝の会の様子

朝の会です。手・指の操作が苦手だったり不器用な子どもも多く、OTのような内容を取り入れています。必要な子どもには少し援助する事で成功が体験できるようにし、「やってみたい」という気持ちに繋がっています。友だちの様子を皆、よく見えています。個別療法の時間とは違い、友だちから学んだり、やる気になっていると思います。



お散歩の様子

お散歩です。自分で立つ事は難しい子ですが歩行器があれば自由に歩き回る事ができ、みんなと同じように外を歩けるこの時間が大好きです。長距離を歩いて足元がフラフラになっても歩くと言って歩行器から手を離さないその気力に職員もビックリさせられます。行き先は、写真カードを使い、選んでもらう時もあります。自分でやりたい気持ちを大切に、介助がないとできないと諦めてしまう事が多い子ども達に、なるべく自分で選択した事ができる機会が増えるといいなと思っています。

給食です。握る力が弱く、スプーンの操作が難しいので、すくいやすい自助スプーンや側面が斜めで滑り止めがついた食器を使っている子もいます。一口食べるのにとっても時間がかかりますが、全部介助するの



給食の様子

ではなく、職員がスプーン操作を援助しながら、なるべく自分で食べる練習ができるよう、少人数の子ども対職員の体制です。職員と時間に余裕がある環境の中で、丁寧な保育・療育が実践していけるのだと思っています。給食の時間に言語聴覚士（ST）がクラスに入って口の動きや咀嚼の様子を見てくれたり、食形態の相談にのってもらう事もあります。

センターの良いところは、療法士を始め保健師、ケースワーカーなど様々な職種の人がいることです。情報を共有し相談しながら一人一人にあった支援を探っていきます。自分でやってみたいという気持ちが育つ中で運動面も発達していくのだと思います。そして運動発達だけでなく、お友だち、職員と関わりながら色々な経験をしていく中で情緒面、健康面など広く子どもの発達を促せられたらと思っています。

## すずらん組について

すずらん組は重症心身障害児のクラスです。運動発達のハンディが大きく未定額で寝返りも難しい子が多く、日常的に医療的ケアが必要な子が半数を占めています。障害が重くても、同年齢の子どもと変わらない活動をしている様子を紹介します。

朝の支度です。取っ手のついた連絡帳を出しています。手を伸ばさず、握ることが難しい子ども手の動きを



朝の支度

待って一緒に取り組みます。普段はあおむけに寝た姿勢が多いですが、すずらん組では、座位姿勢を基本にしています。子どもに合わせた座位姿勢で肘を支え介助をすると、給食袋に注目し腕も指先も動かしやすくなります。

朝の会です。姿勢が安定する個人用の座位保持椅子に座っています。おはようボタンを押す時は、押したい気持ちから全身に力が入りますが自分で押せた時の表情は達成感でいっぱいです。絵本を見る表情も真

剣です。絵本に  
合わせて本物に  
触れたり、マス  
コットなどを  
引っ張ったり  
握って選ぶ活動



朝の会の様子

もしています。次の活動を伝える時は、言葉だけでなく具体的に何をするのか示して、期待し、主体的に遊びに向かえるようにしています。

制作場面です。  
子どもに合わせて  
筆の持ち方を変え、握り部分  
を持ちやすいよう  
工夫します。画板  
を子どもの目線  
と手の動きに合



制作場面

わせ、角度を変えることで面白いぞ、できたという達成感に繋がります。絵の具の色も、やり取りで選択します。準備していない色を職員に伝え、分かってもらった時は本当に嬉しそうです。鈴の入った風船を握っての絵の具遊びは、注目し音も弾力も楽しむことができました。

泥んこ遊び・砂場遊びです。手足に過敏さがある子どもは、触れただけで足を引いてしまいが、導入方法を工夫し、たっぷり遊ぶことで受け入れやすくなります。酸素を使用して



泥んこ遊び・砂遊びの様子

いるAくんは泥遊びが大好き。安定した姿勢で支えながら自由な手の動きを保証しつつ、気管切開部分が汚れないように注意します。好きな感覚が広がるよう大豆プール、寒天遊び、温水ベッドなど様々な感触遊びも取り入れています。

公園のブランコです。  
二人とも首がすわって  
いませんが、ブランコが  
大好き。バスタオルをお  
腹の前に入れ隙間をなくし、首や腕を預けられ



公園のブランコの様子

るようブーメランクッションを使います。首の安定が一番ですが、体幹が傾くと不安定になるので、安定した姿勢を補助具で作っています。子どもたちの好きなシーツブランコやトランポリンなどの揺れ遊びでは、

もう一回という要求、表出を引き出す関わりも大切にしています。

運動遊びでは、三角マットやシーソーなどを楽しみます。様々な姿勢で遊ぶことで自分の体の感覚や外の刺激を受け入れます。適切な介助と補助具の使用、また経験を積む中で、体を動かすことが楽しいと感じられるよう遊びを展開します。自分で動いてピンを倒すぞとやる気いっぱい！やりたいという気持ちは重心の子どもも同じです。



運動遊び

外プールです。気管切開の子は抱っこで表情を見ながらゆっくり入ると緊張していた体の力が抜けていくのがわかります。苦手な子は水遊びで慣れてから大きいプールに入ります。浮き輪のようなフロートを身につけると、介助がなくても自由に手足を動かして楽しめます。浮力の助けもあり、全身をしならせて泳いだ後は本当に満足そうです。うつ伏せや姿勢変換が苦手な子も、水中ではリラックス。身体をゆだねて水の気持ちよさを感じます。



外プール

給食は、子どもに合った食形態（ペースト食、半ペースト食、普通食）と介助方法で食べます。抱っこで食べる子、胃ろうより注入の子、椅子で食べる子。難しさは違いますが、誤嚥に注意しながら、安全に一緒に楽しく食べています。



給食の様子

## 大切にしていること

### ●あそび

- ①七感(五感+前庭感覚・固有感覚)を使ってたくさん遊び、しっかり感じ取れる体験—遊びの中で受け止めづらい感覚を引き出したり逆に過敏になっている部分を受け入れやすくしたり自分の身体の感覚の気づきを促していく。
- ②自分の好きな遊びや感覚を身につける—どの感覚の遊びが好きなのか、また受け入れやすいのか、好きな感覚を知り働きかけ方を工夫していく。障害特性や疾病、発達の姿を理解し遊びを展開していくことが大切。
- ③姿勢や介助方法を工夫して自主性を引き出す—個々の運動発達課題から、あおむけ、うつ伏せ、支え座位など様々な姿勢で遊びの経験を積み重ねていく。体のハンディは大きくても持っている力を十分に引き出し楽しく遊び「できた！」の達成感を感じられるように。
- ④医療的ケアの有無にかかわらず同年齢の子どもたちと同じ遊びや活動にチャレンジ—保護者、医療スタッフと連携しながら保育を展開していく。

### ●社会性

初めは親子登園で通園の生活に慣れていきます。家族と違う声や抱き方など感じながら家族以外の介助も上手に受け通園が安心できる場になっていきます。その後の単独登園ではお母さんがいなくても大丈夫という自立心と、集団の楽しさやお友だちを意識する気持ちの芽生え、一緒に楽しく遊ぶ経験を大切にしています。子どもの表現方法は発声、姿勢、表情、しぐさ、身体力の入れ具合など様々ですが、サインを丁寧にくみ取り、言葉や触れ合うなど言葉以外のコミュニケーションで気持ちを共感しあっています。

障害が重くても医療的ケアがあっても子どもたちの気持ちをくみとり、いろんな経験を重ね好きな遊び

を広げていけるように、子どもたちの笑顔が輝くように療育方法を工夫しながら日々保育をしています。

## 保護者支援

通園部は、毎週水曜日は親子登園日です。親子で、行事やたくさんの遊びに参加し、子どもと楽しさを共感してもらい、しっかりとした親子関係を築いていくように支えています。子どもの現状から出発し、必要な手立てを子どもに寄り添って考えていくことを大切にしています。

学習会等を通じて、子どもの特徴をつかみ、子どもが分かりやすい関わり方を身につけていけるように支えています。専門職をはじめ、いろいろな方向から子どもの困難さについて一緒に考えます。先輩保護者からの話を聞く機会も設けています。

アフターフォローとして、卒園・退園してからも職員と相談できる場をつくっています。就学・就園先とも連絡を取り合い、子どもが安心して生活を送れるよう切れ目のないサポートをしています。

保護者の仲間づくり。誰にもわかってもらえないと思っていた悩みを心から分かち合える保護者仲間に出会い、互いに育ちあえる仲間づくりを支えています。

思うようにいかない子育てに、落ち込んだり、焦ったり。将来への不安、周囲への気兼ねなど、保護者が抱える負担は想像できるものではありません。子ども自身も発信や要求の表現方法が未熟なので、一生懸命子育てに向かおうとしても、さらに不安やストレスが高まり、親子関係や愛着関係が成立しにくいことも事実です。職員と共にたくさんの経験をする中で、我が子と向き合い、仲間づくりをしながら、前向きに子育てする力をつけることは、将来への見通しを持ちながら、楽しんで子育てすることにつながっていくと思います。今後も保護者の思いに寄り添いながら、信頼関係作りを大切に、センターとのつながりが心の支えとなるように支援していきたいと思えます。

## 「よつ葉の会が大切にしてきたこと ～これまで・いま・これから～

社会福祉法人よつ葉の会 療育センター引継事業責任者 服部史忠

令和4年11月30日(水)療育講演会において、社会福祉法人よつ葉の会が療育センター事業を運営するにあたり、当法人が大切にしてきたこと～これまで・いま・これから～というテーマで想いをお伝えさせていただく機会をいただき感謝申し上げます。

### 1. よつ葉の会が大切にしてきたこと「これまで」

当法人は、平成11年に設立し、平成13年4月に障害者支援施設「よつ葉の家」を開設して以来、法人名

称にある四葉のクローバを「利用者様」「ご家族様」「職員」「地域の皆様」を四つの葉っぱとして例え、すべての人々の幸せを願い事業を展開してまいりました。

現在、西区エリアにおいて障害者支援施設やグルー





## 対応が難しい家族への支援

講師：名古屋市立大学 坪井裕子教授(人間文化研究科臨床心理コース)

日時：令和4年9月14日(水)

会場：熱田文化小劇場

市内5カ所の地域療育センターが合同で開催している研修会を2年ぶりに開催しました。オンライン配信を併用して開催した研修会の内容を、聴講ノートの形で報告します。

### 1 文化的背景の異なる方・海外ルーツの家族について

#### <日本に住んでいる外国人の現状>

197の国と地域の方が住んでいて、約8割はアジア出身。1位は中国(約3割)。約4割は大都市近辺に住んでいて、1位は東京都、愛知県が2位。在留資格では、永住者が最も多く約3割、次に技能実習生。留学生はコロナの影響で減っている。

愛知県には、約26万5千人が住んでいて、1位がブラジル、2位が中国、3位がベトナム、次いでフィリピン、韓国・朝鮮。最近、ネパール、ペルーが増えている。自動車関連産業のある豊田市・春日井・小牧では集住。

名古屋市には、約8万人が住んでいて、国と地域の数は140。1位は中国、2位は韓国・朝鮮、3位はベトナム、次いでフィリピン、ネパール。区の中で外国の方が住んでいる割合の多い区は、1位が港区、2位が中区、3位が中川区、それから南区、千種区。

#### <外国ルーツの方と関わる際の留意点>

アセスメントが重要。言葉の違いもあるが、文化的背景の違いも大きい。本人の発達レベル、保護者の意向や教育方針、来日した背景や経済力など、総合して見立てる。

言語については、家庭で使用している言葉(両親・対子ども)、子どもの理解しやすい言葉、話しやすい言葉、を確認するとともに、保護者の子育ての意向(母国語中心・バイリンガル・日本語中心)を聞いた方がよい。この方針が決まっていないと子どもが混乱してしまう。二つの言語を同時に習得することはなかなか難しく、日常会話はできても、読み書き、学習言語がついていけないこともある。セミリンガル(日本語でも母国語でも学習が困難な状態)になると一番困る。

保護者の希望を聞き、子どもの能力をアセスメントし、相談していく。アセスメントでは、母国語・日本語それぞれの言語理解・言語表出の状況、音声言語以外(ジェスチャーなど)の理解、経験不足が言語に関わることもあるので生活経験も確認する。言葉以外に発達障害特有の行動特徴も生活の話を書く中で確認していく。

#### <文化的背景の異なる方への配慮>

集住(団地などにルーツが同じ方がたくさん住んでいて、コミュニティがあり、助け合って、通訳してくれる人もいる)か、散在(近くに母国の知り合いがいない、同じ言語を話す人がいない)かで、家庭の環境が違ふ。環境(ライフスタイル・生活習慣・文化など)が違ふ中で、日本で住んでいくことへの適応に困っている家族もある。

子どもの発達や療育についての考え方の確認が必要。国の背景によって、何歳くらいにこれくらいのことが出来るという目安や感覚が日本とはずいぶん違っている。発達障害の治療や教育に関しての価値観や感覚も違ふ。外国ルーツに限ったことではないが、家族がどういう風に子どもを育てたいか、自分自身がどんな人生を送りたいのか、多様性がある。

文化的な背景が異なると、生活習慣も違い、日本の常識とはだいぶ異なる。基本は母国の文化を尊重する、けれども、日本の文化も伝えていく必要がある。

母国の言語と文化は、その人を形成する重要なもの。母国語を大事にすることがアイデンティティに関係してくる。日本にいても、母国の言葉を忘れない、母国の文化を大事にするのは、とても重要。一方で、日本に住んでいる時には、日本の文化、風習、行事、季節感も知っていただかないといけない。折り合いをどうつけていくか、日本も母国も大事にしていく、ということで共有していく。

### <特性からくる育てにくさは共通>

発達障害特有の行動特徴は、言語や国に関係なくみられる。視線が合わない、名前に反応しない、人見知りがない、常同行動や感覚過敏などは言葉に関係なく出てくる。ただし、多動性・衝動性は、国によっては明るくて元気な子と捉えられることもある。

コミュニケーションが取りにくい、意思の疎通が難しい子どもを育てる大変さは、国や文化が違っていても共通。愛着の問題につながる家族のさみしさ、苦しみ、悲しみも共通。

## 2 いろいろな意味でハイリスクな家族

### <保護者自身に医療・福祉的な支援が必要な場合>

メンタルに課題を抱えている場合は、基本的には医療との連携がポイント。通院や服薬の状況、地域の保健師との関わりを確認する。季節的に具合が悪くなる方もある。具合の悪さによっては、児童相談所と連携（一時保護・入院の手配など）。福祉サービス利用については区役所と連携。使える資源を探し、保護者の負担を減らす方向で支援を考えていく。

家族関係に課題がありそうな場合、保護者自身の気持ちを丁寧に聞く。実家・義実家との関係、保護者自身の育ち、夫婦関係がどうなっているか。サポートしてくれる人がいるかないかも重要。

逆境的な環境（虐待など適切でない養育環境）で育った人は、育児不安が高い、しかし、援助要請が出しにくい、という研究結果がある。「困ったら相談してね」と言うことが多いが、逆境的な環境で育った人ほど、困っていても言えない。アウトリーチ、日頃から「最近どう?」「調子どう?」と声をかけ、味方になる人がいることを、働きかけておく。困る前に関係ができていて、自分から言えない時に「どう?」と聞かれる、ことで困っていることが言いやすくなる。

不適切な養育の可能性がある場合、児童相談所との連携が必要。親子関係・きょうだい心配な家族、保護者自身や子どもの特性で、衝動コントロールが上手にできずに暴力になることもある。子どもの最善の利益、子どもを守ることを前提に、児童相談所に任せ、療育センターでできることを役割分担。保護者のフォローができるのが療育センター。

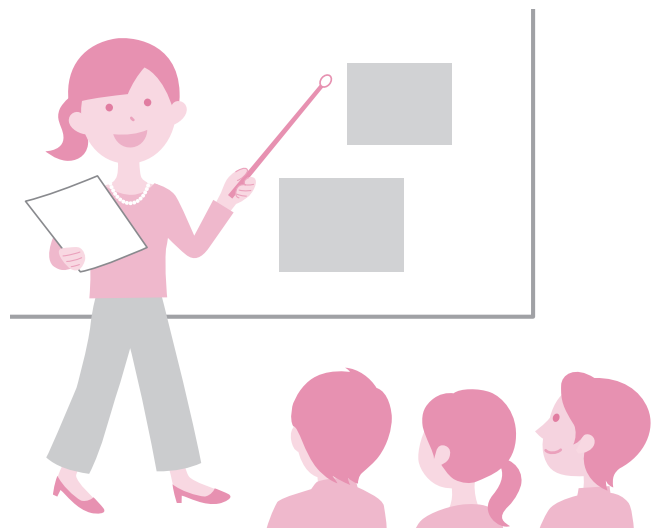
### <保護者との関わりのポイント>

いろんな保護者がいて、いろんな気持ちがある。子どもの発達を気にしていない保護者も、発達に課題がありそうだと感じていて直面化したくない保護者もいる。発達障害の傾向がある子どもに対して、適切な対応ができず、自分のしつけが下手だと思っていることもある。子育てがうまくいかないことに、親としての引け目を感じていることも多い。自分が責められるのではないかと、恐れを抱いていることもある。療育センターにつながるまでに、すごく不安を抱いている場合もある。

大事なのは保護者の方が気になっていることを聞くこと。的外れに思えるようなことでも丁寧に聞くことが大事。日常生活のことを丁寧に聞きながら、共通理解が得られそうなところを入口にする。助言は、あまりしないように気をつける。助言や指導をしすぎると、保護者はプレッシャーを感じる。負担にならないように、小出しにしながら、試した結果を次の時に教えてもらう。

相談では、知識や情報を提供したり、具体的な対処法を伝えることもあるが、丁寧にゆっくり話を聞きながら、信頼感・安心感を持ってもらうことが大切。子育ての力を援助すること、サポートをうまく受けられるようにしていくことを意識する。

対応が難しいといわれる保護者や子どもは、上手く支援が受けられていない可能性がある。親子に関わる機関が連携していくことが大切で、保護者と子どもを支援していく人が増えることが、本人と家族、地域社会にとって有意義なことである。



# 名古屋市・よつ葉の会により、引継ぎ共同療育を行っています。



北部地域療育センターは、令和5年度から社会福祉法人よつ葉の会へと民間移管されることになりました。それに伴い、令和4年度の一年間は、引継ぎ共同療育を行っています。今年度までセンターを守ってくださった名古屋市の職員さんと、来年度からセンターを運営していくよつ葉の会職員が、クラス運営や診療・訓練などを一緒に行う中で、センターでの療育を教えていただきました。年度当初はわからないことばかりで戸惑うこともありましたが、名古屋市の職員さんから丁寧な説明をいただき、ことができて、一つひとつ学びながら経験を積み上げてきました。引継ぎを受けられる中で一番感じたのは、子どもたちはもちろんですが、親御さんに対しても、常に暖かい言葉で優しく対応される姿勢です。ソフト面・ハード面はもちろんですが、そういった暖かいハートもしっかり継承しながら、本人・ご家族・職員・そして地域の人たちが「子どもの小さな成長を喜び感動し合える」センター運営をめざし、地域共生社会へつなげていきます。

一年の期間をかけて、引継ぎ療育を行っています。



## 診療部

診療部では、お子さんの相談・検査・診察を行っています。育児で不安な事、困っている事を解決できるよう、今枝医師のもと毎日たくさんのお子さんに関わらせていただいています。これまで診療に携わってこられたみなさんの業務を途切れることなくつないでいくと共に、「お母さん、お父さんが笑顔でお子さんと過ごせるように」という想いを引き継いで、精一杯頑張っていきます。よろしくお願ひします！



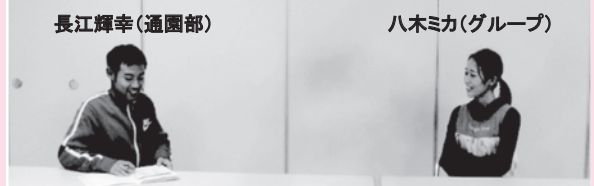
## 相談部

相談支援では、主に福祉サービスの利用に関わる相談や必要な計画作成に携わっています。通園に入園されるお子さんから卒業し就学期のお子さんまで、これまで療育センターで関わらせていただいた多くのお子さん達と繋がることができ、その育ちをご家族と一緒に見守り伴走することができるのがとても魅力だと感じています。何か困ったとき、ふと迷って足が止まったときに「ちょっと声をかけてみよう」と気軽に声をかけて頂ける相談員を目指して頑張りたいと思います。

## 引継ぎ職員インタビュー

長江輝幸(通園部)

八木ミカ(グループ)



### Q.療育センターを希望したきっかけは？

こども園で保育を行っていて、障害をもつ子どもを担任する機会があり、一人ひとりの特性に対してどのように支援すれば良いのか難しさを感じると同時にもっと身近なところで関わり学びたいと思ったからです。(八木)

### Q.やりがいに感じることはどんなところですか。

子ども達と体を動かして遊んでいる時の、楽しそうな笑顔にやりがいを感じます。(長江)

経験を重ねることで少しずつ子ども達の行動の背景が分かるようになり、自分らしく支援できるようになってきて楽しいです。(八木)

### Q.苦勞した点はありますか。

学ぶことがとても多いと感じ、メモしたことを聞いたり調べたりしながら学んできました。(長江)

保育と療育での就学に向けての取り組みや仕組みに違いがあり勉強が必要でした。(八木)

### Q.来年度に向けて、思いを教えてください。

これまでのセンターへの信頼を保ち、長く良い関係を続けられるセンターでありたいと思います。(長江)

大事にしてきたことはしっかり守りながら、自分らしく子どもとご家族に寄り添っていければと思います。(八木)



## 通園部

就学前の子どもたちが通う通園部です。5つのクラスに分かれ、ひとり一人に合わせた個別支援計画をもとに日々療育を行っています。北部の先生方の子どもに対するかかわり方を間近で見ながら、丁寧な支援の大切さを学ばせていただいています。クラス運営を主体的に行いながら、来年度も今までのような療育が出来るよう、保護者の皆様の思いにも寄り添いながら頑張っていきます。



## グループ

グループでは、診察を受けたお子さんが小集団の経験を通して親子が笑顔で参加し育児への自信に繋がるようサポートさせていただきます。

年度当初は50人程のお子さんの名前を覚えるのに必死な日々でしたが、今ではお子さんの成長の変化に驚くと共に、保護者さんの笑顔が増していることにやりがいを感じています。今後も療育グループならではの多種多様な専門職の視点で、お手伝いしていきたいと思っています。

## 名古屋市北部地域療育センター

### ホームページ



### 名古屋市北部地域療育センターだより 第17号

発行 2023年2月

編集・発行 名古屋市北部地域療育センター

〒451-0083

名古屋市西区新福寺町2丁目6番地の5

TEL (052) 522-5277

FAX (052) 522-5279

